千葉省三童話全集（第一巻）

月報 1

千葉省三先生を囲む会

昭和42年4月15日　於神田"新樹"

この座談会は、児童文学史懇話会の主催によるもので，千葉省三童話全集の刊行を機に，その編集委員の方々が発起人となり，今後いろいろの方々から直接に日本の児童文学の歴史を伺っていこうという趣旨で企画されました。この座談会はその第1回としてもたれたものです。約2時間にわたって千葉先生から雑誌『童話』の頃を中心に，貴重な，たくさんのお話を伺いました。児童文学史の資料としても大切なものになると思われます。なお，この月報に収録したのはそのごく一部分で，速記全文は近く『日本児童文学』誌上に発表される予定です。出席は次の方々でした。千葉省三，関英雄，菅忠道，鳥越信，滑川道夫，茶木滋，山下次男，小林静江，長尾憲子，本間玉恵，遠藤寛子，阿万紀美子，池田春子，小西正保（順不同・敬称略）

目次

千葉省三先生を囲む会……（一）

関　皆さんご承知のように、千葉先生は大正九年にコドモ社という出版社から創刊された『童話』という雑誌を編集されていて、この『童話』は、若いころの千葉先生が、ご自分で企画されて出した雑誌なんです。その『童話』に創作童話を発表されて、この雑誌が大正十五年の七月号限りで廃刊になったあと昭和三年の七月に『童話文学』という同人雑誌を、酒井朝彦さん、水谷まさるさん、北村寿夫さんという、その三人の友人の方たちといっしょに発行されまして、『童話文学』の誌上に、さらにつづけて創作童話をおかきになった。『童話文学』が昭和六年に廃刊されたあと、昭和十年には『童話文学』の後身ともいうべき、『児童文学』という同人雑誌をまた出されまして、ここにも発表されてきた。昭和十二年の何月でしたか、『児童文学』が廃刊された以後は、ほとんど創作童話の筆をお断ちになって、今日におよんでいる。創作童話のほかに、講談社の、『少女倶楽部』とか『幼年倶楽部』というふうな雑誌に、大衆的な児童読物も、たくさんお書きになってきている。だいたい創作のほうの、千葉先生の歩みというものを、ごくかいつまんで申せばそういうことです。

童話をたくさんお書きになっていますけれども、代表作とい

東京都文京区
水道 1—9—2
岩崎書店

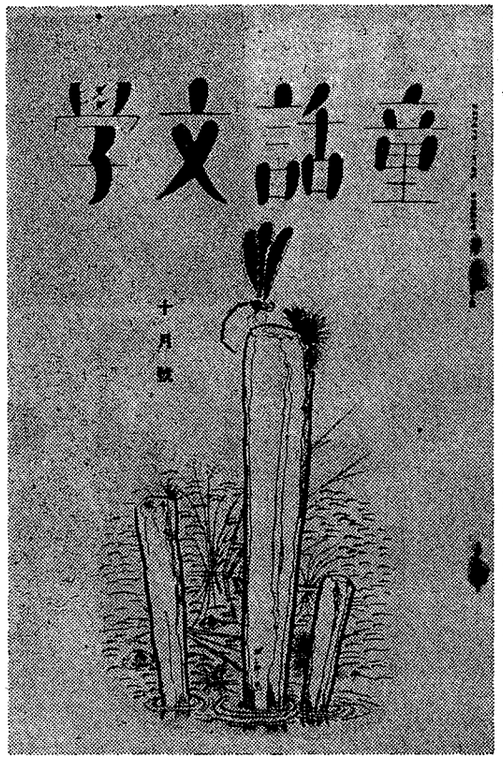
雑誌『童話』大正14年７月号

いましょうか、有名な作品は、ご承知のように、大正十四年に発表された「虎ちゃんの日記」ですね。これはいま、岩波少年文庫をはじめ、いくつかの単行本におさめられておりますけれども、そのほかに「乗合馬車」とか「高原の春」「けんか」「井戸」「仁兵衛学校」というふうな、農村の子どもの姿を生き生きと書いた、名作といえるんじゃないかと思われる作品を、いくつもお書きになっております。

きょう、私が読者の立場として伺いたい、読者はたぶんこういうことを聞きたいだろうと、とくに戦後のこの二十年間に、新しく千葉先生の読者となった方たちは、こういうことを聞きたいんじゃないかと思われることを、まず類推して伺いますけれども、千葉先生が最初に童話をお書きになる動機といいましょうか、大正七年に『赤い鳥』が創刊されまして、大正の後半期というのが、童話、童謡雑誌がたいへん繁盛した時代なんですけれども、そういう時代の雰囲気ということは、もちろんあったでしょうけれども、そのほかに千葉先生が、童話の道に志を立てられた動機といいましょうか、つまりなぜ書きたかったか、なぜ書かねばならなかったかというふうなことを、さかのぼって、若い頃のお話をちょっと伺いたいと思うんですけれども。

千葉　むずかしいね。動機なんてないですけれども、いわば子ども雑誌を編集したから、それで書く気になったんですね。だけれども、中学の頃の同期生が、だいぶ前ですが訪ねてきてそして、君は中学の時分に、子どものものを書くって言うてたって。そういうのをみると、そのころからそんな気があったんだとみえますね。もう忘れちゃっています。ただ、コドモ社へ入ったというのは、やっぱり一種の就職でしたから、だからそのときに子どものものを書こうと思ってやったんじゃなくて、コドモ社へ入ったということが原因で、子どものものを編集したんです。そして、そのころは『コドモ』と『良友』でしたから『コドモ』と『良友』が、どうにかこうにかやっていけるような形ができたものだから、それで別の雑誌を出してみないかとすすめられて……そのときにやっぱり『赤い鳥』やなんかの影響を受けていたんでしょうが、はじめの『童話』を出すときには、『赤い鳥』のような雑誌をつくるつもりじゃなかったですね、ぜんぜん。むしろ『譚海』という雑誌があったでしょう。講談社で出した……。

関　博文館。



同人雑誌『童話文学』昭和４年10月号

千葉　博文館でしたか。『譚海』をもう少し高級に、子どもに合うようにやろうというようなね、あれはあまり少年講談みたいな雑誌だったでしょう。少年講談みたいな雑誌じゃなくて、もっと子どもの読物に適した『譚海』のまねをしようと思ってはじめたんですよ。だけれどもやってみると面白くないですね。それじゃ、それで計画中から変更して、そしてやっぱり『童話』の形になったんです。

鳥越　コドモ社に就職なさったときの状況というのは、ちょっと……その前はなにをなさっていたんですか。

千葉　その前は植竹書院にいました。

鳥越　やっぱり同じく出版社ですね。

千葉　はあ、植竹書院というのは、だいぶ新潮社と拮抗してやるくらいの……あれは栃木県の財産家の息子でね。それがやって、だいぶ翻訳物を出していたが、そのときに相馬泰三だとか、それから鈴木なんといったかね、早稲田へ行った人で……あの人たちがみんな入社していました。

鳥越　相馬さんも植竹書院の社員だったわけですか。

千葉　そうです。

鳥越　本も出されておりますね。植竹書院から。

千葉　そうです。桃太郎の絵本もあすこで出したんです。

鳥越　ああそうでしたね。

千葉　そこへ入っていたんですが、つぶれちゃったんですよ。そして無職でいました。そうしたら、万鉄五郎さんという画家が、コドモ社へ紹介してくれたんです。あの人がコドモ社の絵付録、組立の付録をやって、そして関係していたものですから、あすこで人を探しているから行ってみないといわれてそれから行ったんです。

鳥越　その植竹書院にお入りになる前は……

千葉　日月社という出版社です。

鳥越　ああ、やっぱり。

千葉　それもつぶれちゃったんです。（笑）

鳥越　その日月社の前はどうですか。

千葉　国にいました。

鳥越　それは職にはなにもおつきになっていなかったんですね。

千葉　はい。日月社のほうは、半田良平という、知っていますか、歌人。

鳥越　歌人でいますね。

鳥越　信氏

千葉　私は知りませんでしたね。

鳥越　そうですか。

千葉　なんか、先生になったですが。あの人が私の同郷で、私の先輩だったものですから、その人のところへ行って、その人が紹介して日月社へ入ったんです。日月社がつぶれて植竹書院へ行って、植竹書院もつぶれて、今度は浪人していて、コドモ社へ入ったんです。

鳥越　そうすると、やっぱりなんか出版社にお入りになりたいというお気持は強かったわけですか。

千葉　はあ、それはその目的で家を出たんです。なにかそういう関係なもので……

鳥越　それは作家になりたいということと、だいたい裏はらの関係ですか。

千葉　そうでしたね。それはやっぱり、なれるものならなりたいと、自分で仲間なんか集めて同人雑誌――同人雑誌ったって、もちろん印刷なんかしたんじゃなくて、謄写版ですが――なんかやっていました。そんな野心があったんですね。

菅　ちょっと関連してお伺いしていいですか。先生、作家志望というふうな場合、やはり小説をお書きになりたかったわけですか。

千葉　そうそう。

菅　その頃の文壇の思潮もございましょうけれども、先生ご自身の小説では、どういう作家の影響をお受けになっておられましたでしょうか。自然主義の影響も強い方ですか。

千葉　自然主義ですね。田山花袋だとか、島崎藤村のものだとか、ああいうのを愛読していました。

菅　そうすると先生の童話のなかには、日本の自然主義文学の主義主張というのが、底流にはずっとあったというふうにいえましょうか。

千葉　いえるんじゃないでしょうか。あのころ、そういうふうに、子ども自身の生活を観察したりする童話がなかったんです。大人が与える童話ばっかりだったんですよ、みんな私の世代は。なんらかの意味で、子どもをここまで引きあげようとか。たとえば、それが文学的なものであっても、子どもを文学の域まで引きあげてやろうという童話だったですね。それはいろいろな童話があったですが、私はやっぱり、私が今になってからいう理くつかもしれないが、子どもの世界まで自分が下がるんです。それだから童心主義なんていわれましたが、子どものものを尊重するという意味で。いまでもやっぱりそうです。子どものものは子どものものとして、貴重なものだと思って、子どもの生活はそう思ってます。

関　千葉さんが大人の小説をお書きになったわけですね。同人雑誌に。

千葉　はい、書きました。

関　そのお話を私もはじめて伺ったわけですけれども、というのは浜田広介さんでも、酒井朝彦さんでも。みんなあの頃の作家というのは、だいたいはじめ大人の文学、大人の小説をいちおう志望されて、それからだんだん童話へ来たという人が、小川未明さんからして例外じゃないわけなんだけれども、千葉さんの場合もそうだったというふうなことが、これは児童文学史の上の、一つのその時代の作家のあり方ということで、特徴づけられると思うんですけれども。それといま菅さんが聞かれたことも、前に一度伺ったことがありますけれども、藤村、花袋なんかの影響を受けられたということ。童話を書く上で、とくに影響を受けられたといいましょうか、あるいは好きな作家とかいうような、この前はたしかマーク・トウェーンのことなんかをちょっと伺ったと思うんですけれども、そのほかにもなんか、千葉先生が童話を書きだす上に非常に参考になった作家ですかね、いい意味で、その作家とか作品とかちょっとお伺いしたい。

関　英雄氏

千葉　要するに外国の作家はみんな参考になったですね。「不思議の国のアリス」なんかたいしたものですわね。それから「ピノキオ」だってね。ああいうのはみんな参考になりましたね、そういう意味では、それでもやっぱり「ピノキオ」なんかは、私は好かなかったです。多少、いろいろな意味でも勧善懲悪でしょう。そういうものへ結論をもっていくような全体の思考が好かなかったです。それより「不思議の国のアリス」なんか、まったく子どもの世界ですよね。対象をみて書いて、それ以外になんにも与えようとしてないんですよ。子どもの生活そのものを書こうとしました。そういうので「不思議の国のアリス」なんか好きでした。それから「トム・ソーヤーの冒険」だってそうですよ。けっしてあれからなにかを引きだそうとしませんね。

菅　藤村や花袋というふうなお話があったんですけれども、大正二年に実業之日本から子どもの叢書が出ておりますね。そういうものなんか、お目にしたことがございましたか。徳田秋声とか、田山花袋、島崎藤村。

千葉　私は自分が雑誌の編集をやるまでは、子どものものに志すまでは、子どものものは見なかったです。小説は見ましたけれども、あんまり興味は感じませんでした。

関　ツルゲーネフはだいぶお読みになった……

千葉　ツルゲーネフは好きでした。

関　コドモ社へ入る前ですか。

千葉　いいえ、やっぱり入ってからです。「猟人日記」なんてのは大好きでしたから。

関　コドモ社にお入りになったのは、たしか大正五年でしたね。

千葉　そうでしたかね。もっとも、その前に見なかったか、好きでなかったかというと、やっぱりちょっと、はっきりいつごろからということはいえませんね。

鳥越　それから、話がとびますけれども、コドモ社の絵雑誌の『コドモ』というのは、創刊はいつだったですか。

千葉　あれは私が入ったときが三巻だったですか。

鳥越　そうすると二年くらいですね。

千葉　『コドモ』は、たしか大正三年だったですね。

鳥越　それで、五年にお入りになってから、三巻目あとと

うことになりますね。

千葉　『良友』が大正五年の創刊だから。

鳥越　そうですね。『良友』よりちょっと早い。

千葉　そうですね。

菅　忠道氏

鳥越　あれは、ちょっとなかなかいま手に入らない雑誌なんですけれども、一、二冊ちょっと見たことがありますが、あれはたしか署名入りの原稿はほとんどない。ほんとうの絵雑誌ですね。しかし、そうすると、あれは文章などは、やっぱり編集部の方がお書きになったんですか。

千葉　そうです。

鳥越　そうすると、あのなかにも千葉先生のお書きになった文章がそうとうあるということですかね。

千葉　ほとんどそうです。

鳥越　田中良さんは、『コドモ』の上では、どういう役割をしていらっしゃったんですか。

千葉　あの人はどういう役割といいますか。そうそう、『良友』の出たときに、本画家として頼んだんです。

鳥越　社員じゃないんですね。

千葉　社員じゃございません。『良友』のをみんな一人でやっていたものですから、それで『コドモ』のものもしたがって注文して……

鳥越　ひところ『コドモ』の表紙に田中さんの絵がずいぶんつづいたことがございましたね。

千葉　そうでしょう。

鳥越　そんな印象がどうも残っています。

千葉　あの人がいちばんあのころじゃ新しかったんです。目先が変わっていたものですからね。そして社主の木元さんが好きでした。それであの人がやっていました。

関　千葉先生の童話といえば、必ず川上四郎さんの絵が、コンビのように浮かんでくるわけですけれども、川上さんとは、いちばんはじめ、どこでお知りあいになって……

千葉　コドモ社です。

関　コドモ社に川上さんがおいでになって……。

千葉　コドモ社の『コドモ』を、やっぱり頼まれて描いていたんです。ところが川上君、『コドモ』を何回かやるうちに、いやんなったんだかなんだか、とにかく社主の木元氏と不仲になっちまって、よしちゃったんですよ。そしてしばらく休んでいたんです。そこで、『童話』が出たときに、私が川上君のところへ持っていって相談をした。はじめ『童話』の表紙は川上さんではなくて、田中良さんが描いています。それからあと、二、三人代わっています。そんなことで二、三度表紙をかえて画家がきまらなかったんですよ。それで私が川上君のところへもって行って、はじめて川上君のところできまったわけです。ですから『童話』も、はじめは実にいいかげんなものでしたね。中味もいま言ったようなことだし、画家もきまらないし、童謡作家もきまらないし、なんとも、あたりばったりで、よくつぶれないでつづいたと思ったりして。あんまり無責任というか、なんというか……。

関　雑誌『童話』と千葉先生の関係、および『童話』の千葉先生の編集者としてのお仕事、これはとてもいろいろあって、『童話』に寄稿した相馬泰三さんはじめ、いろんな作家と千葉先生との関係などをお伺いしだせば、それだけできょうの話が終わってしまうと思うんですけれども、やっぱりさしあたり千葉先生自身の作品のことにいちおうしぼりまして、あとからまた別の話題も出るでしょうし……。

「虎ちゃんの日記」の虎ちゃんという主人公は、あれは千葉先生の少年時代のことじゃないかと、私なんかも昔はそう思っていたところが、そうじゃなくて、つまり虎ちゃんはイコール千葉さんの子ども時代ではないというお話を伺ったわけです。むしろ「虎ちゃんの日記」でいえば、あそこに出てくる敬ちゃんですか、東京から来たお坊ちゃんですね。むしろ敬ちゃんなんかに近かった。わりに体が弱くて、虎ちゃんのような野性的な子どもじゃなかったと千葉先生はおっしゃっていましたけれども、「乗合馬車」とか「高原の春」とか、ああいう一連の、先生の農村の子どもを書いた童話の場合、いろんな子どもが出てくるわけですけれども、たとえば「井戸」のなかの丑とか、ああいう子どもたちは、いちおうのモデルがおありなんでしょうか。

千葉　ありました。やっぱり小学校時代の経験の範囲の子どもたちでしたね。

関　そうすると、先生のああいう田舎の子どもを書いた童話に出てくる子どもたちは、それぞれなんか実際にいた子どもそのものでなくても、なんらかのモデルがあったというふうに考えてよろしいわけですね。千葉先生がご自分でいまお考えになって、ご自分の作品の中で、好きな作品というんでしょうか、あるいは、これはよくできたと思っている作を何編かあげていただいたら、どういう作品がありますか。

千葉　そうですね。まあ「虎ちゃんの日記」とか、「乗合馬車」とか「鷹の巣とり」とか、そんなふうなものがわりに素直に書けましたね。自分が素直に入れた作品が、やっぱりいいと

ある日の千葉省三氏　昭和42年9月

思いますね、好きですね。それからわりに「欄間の彫りもの」など好きなんですよ。これはどうも子どもに向かないらしいけれども、そしていまじゃいろいろな批評もあるでしょうけれども、私、わりにすきです。

関　「欄間の彫りもの」という童話は、短編ですけれども、やっぱり千葉先生がおやりになっていた『児童文学』という同人雑誌の昭和十二年ですか、もう終刊に近いころに載った作品でした。この作品は、お読みになった方はご承知かと思いますけれども、主人公が大人で、これも千葉先生ご自身を思わせるような人物が出て来まして、子どものころ、よく遊びに行ったお寺の本堂の、天井の欄間のところに彫りものがあるんですね。竜の彫りものだったか、何だったか。

千葉　いいえ、極楽。

関　ああ、極楽の。それが子どものとき、それを見てとても印象が強かったというか、それをみるたびに、なんか不思議な世界に遊ぶような気持がしたのが、大人になってから見たら、子どものときに感じたような色も光も失なわれていて、子どものときの喜びというものは、大人になったら二度と返ってこないんだなというふうな、むしろ千葉先生のこころを童話にしたような作品なんですね、あの作品は。私も一つの文学作品としては、たいへん好きな作品なんですけれども、千葉先生の児童文学論などを書く場合などのことを考えますと、たいへん先生に意地の悪い質問みたいになりますけれども、結局「虎ちゃんの日記」を頂点としてたくさんお書きになってきて、ご自分の心にふれる子どもの世界をあらまし書いてきたところで、なんかここで終わりというような気持を、あの「欄間の彫りもの」にもう子どもの世界は失なわれたというふうな、そういう心境が出ているような……ああいう作品をお書きになるのは、もうちょっとあとにして、もっとたくさん「虎ちゃんの日記」のようなものをお書きくだされればよかったと……

千葉　それはわかりますよ。あれはね、やっぱり一つの説明ですよ。これは何度も経験することですけれども、私どもの「山のむこう」という作品がありますね。山の向こうになにか子どもが描いたものがね……やがて山に登ってみたら何にもないんでしょう。だけれども、かつて描いた心のなかの映像だけは消えないんですよ。やっぱり子どもの心に生きているんですね。下りてくると、やっぱり山の向こうの、かつて想像したものがある。そういう、一つの心象の説明ですよね……。

〈新装版の読者へのお断わり〉

この月報は、初版発行時に挿入されていたものです。ですから、執筆者のなかには鬼籍にはいられた方もいますし、勤務先、肩書が現在と変わっている方もいます。そのことをお断わりします。

なお、初版第一巻の刊行は昭和四二年十月で、以後、巻数順に毎月一冊出版され、昭和四三年三月に全六巻が完結しています。

（岩崎書店編集部）